

民俗博物館だより

Vol. IX No. 2

1982. 9. 15



▲ 四季農耕図 (大和高田市・曾爾神社)

目 次

「奉懸絵馬と村のくらし」展によせて(特別テーマ展特集)	1
「奉懸絵馬と村のくらし」展の紹介	
—とくに生業絵馬について—(特別テーマ展特集)	3
「奉懸絵馬と村のくらし」展	
—とくに信仰と芸能にみる念仏踊から—(特別テーマ展特集)	4
地藏盆—地藏盆行事とその源初形態の検討へ—	
(大和の年中行事②⑧)	6
宮座資料としての春日社文書	
—一視点へのアプローチ—(フィールドノート)	8
子供の誕生に伴う絵馬奉懸の風習(民俗調査抄報⑪)	11
お知らせ・他	11

「奉懸絵馬と村のくらし」展によせて

奥 田 猛

当館も昭和49年の秋に開館して、すでに満8年を迎えようとしている。昭和50年度から常設展示の他に、毎年企画展を3回、計画実施してきたところである。

中でも、秋の特別テーマ展は、毎年趣きを変えてテーマを設定し、大和民俗公園建設審議会民俗専門部会の諸先生方の御指導、御助言をいただき学芸員諸君が総力を傾注して、他の館では見られない一味も二味も違ったところを、見ていただこうと腐心のうえ展示している次第である。

民俗博物館という立場から、先人達の遺して呉れた所謂、風俗、習慣、信仰、芸能等からテーマを設定し、一人でも多くの観覧者に理解し得よう配慮している。

今秋の特別テーマ展は、昨年度に引続いて「絵馬」を主題とした「奉懸絵馬と村のくらし」展を計画した。

昨年度は、「日本人の祈り—小絵馬」というテーマで企画し、大和に遺る小絵馬祈願とその信仰を中心に絵馬の変遷を追い、現実に見る小絵馬祈願と対比させ、絵馬のもつ本来の意味は何であったのか。観覧者個々に訴えたつもりである。

本年度の特別テーマ展では、奉懸絵馬すなわち一般的に大絵馬と言われるものが、村のくらしの中にとけ込んで、村の神社、寺院に奉懸した村人の絵馬に秘めた願い或いは祈りの一面を観覧者に提示したいからである。

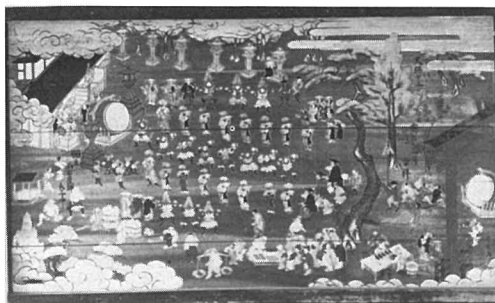
すなわち、前述のように大絵馬と称され村の神社や寺院に奉懸された絵馬を便宜上「奉懸絵馬」と呼称し、小形の絵馬すなわち祈願用の通称「小絵馬」と区別した次第で、特に絵馬の大きさから小絵馬或いは、大絵馬と区別する尺度はない模様である。昨年度の小絵馬に引続いて行う大絵馬の展示で、観覧者により一層「絵馬」が理解していただけるのではないかと考えた次第である。

ただ、昨年度と今年度の特別テーマ展の主担当者が変わったので、展示に盛り込んだ意図も若干、相違すると思われるが、絵馬出現

から奉懸絵馬までと、奉懸絵馬から以後の絵馬に託された祈願、信仰については、一貫した理解が得られるように配慮させた。

ところで、今回の特別テーマ展では、村人からみた絵馬に託された祈願、信仰の諸相を紹介し、更に絵馬と村のくらしのコーナーを二分して、一方では絵馬に描かれた生業（仕事）の背後にある村全体にかかわる祈願・信仰を、他面この祈願・信仰に伴った芸能的要素を、そして両者の絵馬に表現されている村人の風態や風俗・習慣などを読みとって貰い、絵馬を通じて表現し、描写している村落全体あるいは村人の生活の一端を理解していただくことを意図している。

たとえば、具体的に列举すると、四季農耕図絵馬は、橿原市曾我をはじめ、北葛城郡当麻町当麻、御所市室そして大和高田市曾大根などに現存し、展示で紹介しているごとく雨乞祈願やこれを含んだ五穀豊穡祈願のために



▲南無天踊図絵馬（川西町・糸井神社蔵）



▲南無天踊図絵馬
（明日香村・飛鳥坐宇須多岐売命神社蔵）

村人総出で、この絵馬祈願及び信仰がなされたと考えられる。奉懸された絵馬には、村役の人名しか明記されていなかったとしても、五穀豊穡への願いや祈りは、村人全員の願望であったと言っても過言ではないであろう。

また、この四季農耕図絵馬と対置して考えなければならないものに南無天踊(なむてんおどり)・南無手踊(なむておどり)・勇み踊(いさみおどり)図の絵馬がある。この絵馬は、高たか市郡高取町下子島(しもこじま)をはじめ、同明日香村稲淵(あしたけ)、磯城郡川西町結崎(いそぎ)、そして生駒郡安堵村東安堵などに現存し、南無天踊についてのいくつかの伝承が遺っているのである。そして、これらの絵馬が伝えるものは、雨乞祈願或いは雨乞成就の御礼のために、この踊りを神前で奉納したということであろう。

一方、これらの農耕に関する奉懸絵馬は、いずれも祈願・信仰の面でも消極的な一面を拭うことは出来ないが、本県三宅町伴堂(ともんどう)に現存する溜池築造図絵馬は、水の確保のために溜池を築造し、この工事の完成(成就)の御礼として、あるいは記念碑的意図をもって奉懸されたもので、村人全員の積極的な側面を垣間見ることができる。

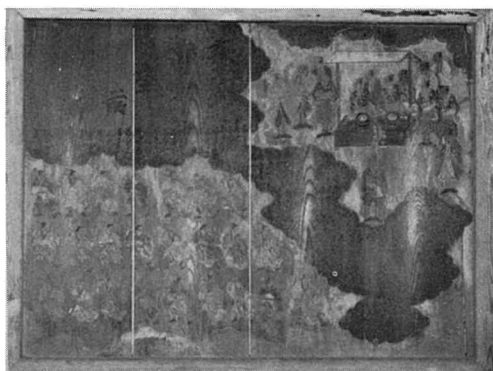
このように奉懸された絵馬の内、県内を中心に窺ってきたが、今回の展示では、県外の奉懸絵馬も紹介し、県内外ともに行なわれている奉懸絵馬の類似性あるいは差異性をも理解して貰えばと思っている。

ここでは、特別テーマ展「奉懸絵馬と村の暮らし」の展览会開催によせて、その一端を考察したにとどまるが、展示では、ここで語りつくし得なかった多くのことを提示してくれることと思う。

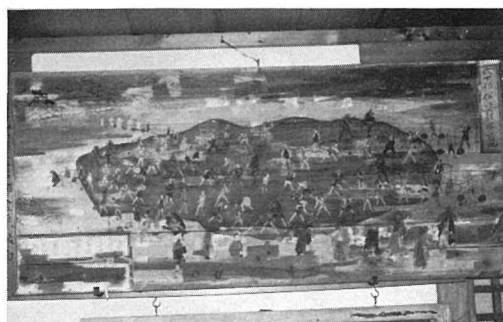
従って、今回の特別テーマ展は、奉懸絵馬即ち大絵馬が出現して以後の村人と絵馬のかかわりを主題としているところに、展示の特色をもっているが、すでに消えつつある、また忘れ去られようとしている民俗の伝承と併せて、村落内の村人の暮らしの様子を絵馬を通じて考え、かつ理解していただければ、この展示の目的は果し得るといえる。

そして、これらの奉懸絵馬が村落内で、脈脈と生きづいてきた姿を観覧願えば幸いである。

(当館館長)



▲お蔭踊図絵馬(三宅町・杵築神社蔵)



▲溜池築造図絵馬(三宅町・杵築神社蔵)



▲お蔭踊図絵馬(城陽市・水度神社蔵)



▲相撲図絵馬(川西町・糸井神社蔵)

「奉懸絵馬と村のくらし」展の紹介

—とくに生業絵馬について—

徳田陽子

絵馬の発生は奈良時代にまでさかのぼることができる。奈良時代の絵馬は、図柄は馬図で、小絵馬であった。

絵馬が大型化してきたのは室町時代末期からである。扁額形式で奉懸するようになった。そのため、小型の絵馬を小絵馬といい、大型の絵馬を大絵馬、あるいは奉懸絵馬といって区別することが多い。そして、奉懸絵馬は、祈願内容や図柄が次第に多種多様になっていく。

今回の特別テーマ展では、この奉懸絵馬をとおして、村のくらしの一端をみていきたい。

■生業図絵馬

奉懸絵馬を、図柄で分類した場合の一つが生業図である。しかし、一口に生業図といっても、職人・商人・農耕などさまざまである。しかし、奈良県の場合、職人・商人関係のものはほとんどない。この点から生駒市高山八幡宮の晒作業図絵馬は奈良県では少ない例と

いえる。また、この絵馬は晒屋の仕事の工程を描いているが、奈良晒との類似という点からいっても、貴重な資料である。

■四季農耕図絵馬

奈良県の場合四季農耕図絵馬が奈良盆地を中心にかなりある。四季農耕図絵馬とは、1年間の農作業を絵馬の中に描写して、このように順調にすすみ、豊作でありますようにと祈願したものである。そのほかたとえば、大和高田市曾^{おね}大根^{おね}の曾^{おね}爾^{おね}神社の明治23（1890）年銘のある四季農耕絵馬は、いわゆる稲作の作業に加えて、3人の女性が綿つみをしている姿が描かれている。これにより、当時、稲作のほかに、畑などを利用して棉も栽培していた様子をうかがうことができる。

橿原市曾^{あめのなけち}我町の雨高^{あめのなけち}市神社の四季農耕図絵馬は、文久2（1862）年銘のほかに雨乞願成就との墨書がある。全般的に豊作のみを祈願したのではなく、雨乞祈願が成就したお礼の



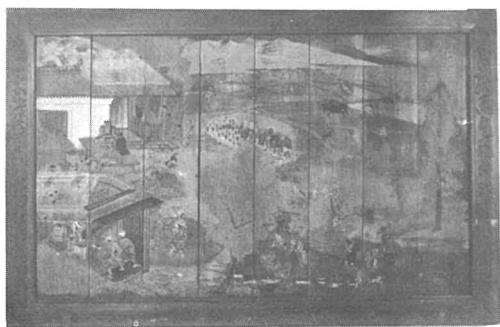
▲晒作業図絵馬（生駒市高山八幡宮）



▲四季農耕図絵馬（橿原市磐余神社）の一部



▲四季農耕図絵馬（大和高田市曾爾神社）



▲四季農耕図絵馬（橿原市天高市神社）

奉懸絵馬であることがわかる。天高市神社にお礼の絵馬を奉懸したということは、神前での雨乞行事のおかげで、雨が降ったということである。実際、この辺は、曾我川と五井川の合流地点であり普段から川水に頼り、日照りになると川掘りをして地下水を汲み上げたりするが、さらに、ひどい日照りのときは、宮司が神前で祝詞をあげて雨乞し祈願したという。

同市中曾司町磐余神社の明治24(1891)年銘の四季農耕図絵馬は、土庫・中曾司・松塚郷中と奉懸者がなっている。このうち、土庫・松塚は、現在、大和高田市に属していて、このことは、水利などの利害関係に基づいた村落の、行政区画や時代などを越えた、強い

結びつきを意味している。

そのほか、私が現在、県内で把握している四季農耕図絵馬だけでも、さらに、香芝町・当麻町・御所市など各地にある。以上から、奈良盆地の村落の主な生業は農耕であったこと、水利問題が重大であったことがわかる。

※

※

このように、奉懸絵馬は、同様の図柄であっても、図柄の細部や墨書されたものの比較をとおして、その絵馬の地域的・時代的な特徴を、よみとることができる。今回は、この奉懸絵馬の民俗的特色を生かして、村の神社における奉懸絵馬を展示することで、村のくらしをみてもらいたいと思う。

特別テーマ展特集

「奉懸絵馬と村のくらし」展から

奥野義雄

—とくに信仰と芸能にみる念仏踊から南無天踊へ—

奉懸絵馬つまり大絵馬に描かれた世界は、往時の村や町の生活が集約されている場合が少なくない。

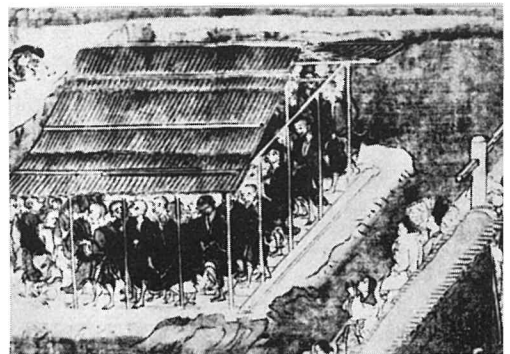
たとえば、すでに前項で紹介されている「四季農耕図」絵馬は、農村における農耕の手順すなわち耕作が行なわれていく工程を表現しているのである。しかし、この農耕の様子が描写されていると捉えるだけでは、この絵馬の農耕図を理解し得たといえないであろう。そこに表現され、描写されている江戸時代(後半)や明治時代の農耕の様子、各時代の農具の形態、そしてこの表現・描写に内在する祈願や信仰の在り方や内容を検討し、理解していく必要がある。

とりわけこの農耕図と関連するものに雨乞祈願や信仰があり、この祈願や信仰と表裏一体となった成就や満願、さらにこの行為として祈願や成就(お礼)のための踊りや絵馬の奉納が延長線上にある。

たとえば、雨乞祈願に奉納された踊、すなわち勇み踊、雨乞成就に奉納される南無天(南無手とも記載する)踊は、祈願・信仰という枠を越えて芸能的要素をもったものであると理解されている。

また、この勇み踊や南無天踊図に描かれて

いる踊り手の風態の内、念仏者が唱導している姿から、一般に念仏踊と勇み踊や南無天踊とが関連していると考えられてきたのであるが、念仏踊から南無天踊への推移すなわち念仏踊と田楽との融合によって南無天踊が生み出されてきたとする点には一つの課題が提示し得る。すなわち、念仏踊が醸成してきた中世から以後に田楽風流と結びつく要件をもつが、中世・室町時代後半の文献史料には、「風流念仏」云々という記述がみえ、田楽風流と風流念仏とが「風流」という接点で融合する契機をもったとも考えられる。だが、この「風流」において融合する媒体がいかなるものであったのかという点が提示されてくることも



▲念仏踊(『一遍上人絵伝』より)

確かであろう。さらに、この視点と関連するものとして、南無天踊図に描写されている念仏者の芸態がいかなるものであったのかという点を挙げることができよう。そして、この芸態が「風流」と結びついたかであろう。

たとえば、空也^{くうだ}念仏踊として周知の京都・空也堂^{くうだどう}の念仏踊や福島・八葉寺の念仏踊の芸態には二者とも近似性が見出し得るが、そこには「風流」的芸態を抽出することは困難なように思えるのである。すなわち、空也堂の念仏踊も八葉寺の念仏踊もその風態の近似性ととも手持ちの用具においてもほとんど同じようなものである。念仏者がもつ鉦^{ひきこ}や杓^{ひきこ}(瓢箪)は、中世以来の念仏者すなわち念仏聖・遊行聖がすでに所謂小道具として持ち歩いていたものであったことは周知のところである。そして、このことは『一遍上人絵伝』(あるいは『一遍聖絵』)に描写されている念仏踊の部分からも窺えるのである。

この点については後日文献史料と絵巻物そして関連する奉懸絵馬を援用して考えてみたい課題であるので、ここでは問題の提示にとどめておきたい。

このことはともかくとして、南無天踊は県下の各地で行なわれていたと思われるが、伝承が跡絶えたり、この踊を表現すべき奉懸絵馬が現存せず今日に至っているなどの事由から、数が少ないように受け取られているのではないかと推察している。

たとえば、その好事例となると考える奈良市日笠の天満神社へ奉懸される絵馬はほとんどが馬の図を主としたものである。しかし、雨乞祈願に南無天踊が奉納されたのは伝承としてのみ現存している。この神社の場合、雨乞祈願には、黒馬の図の絵馬を奉懸する風習が遺っていて、古代以来の遺風が伝えられていると考えられて久しい。だが、雨乞だけでなく、病氣平癒や武運長久などの祈願やお礼にも馬の図の絵馬を奉懸するということから、この日笠天満神社の〈神〉と〈馬〉との関係が古くから伝えられていたと理解すべきであろう。この推定を裏付ける村人の話がある。すなわち、“日笠の宮さんは馬が好きで、それで馬の絵馬をあげる”という村人の感覚がそのことを示すと共に、古くから言い伝えら

れてきた〈伝承〉であったのではなかろうか。

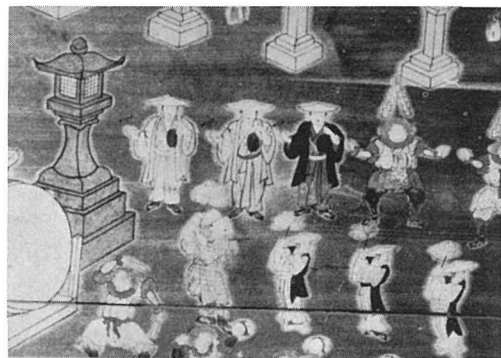
このような条件のもとで日笠天満神社には、南無天踊図の絵馬が存在しないことと、雨乞祈願の成就に絵馬が奉懸されたが、日笠でもいくつかの雨乞祈願の方法すなわち雨乞習俗があったことから、南無天踊が雨乞祈願の唯一の方法ではなかったといえよう。この日笠地区での雨乞の方法には5・6種の方法があったと聞き及んでいるが、この内の1つが南無天踊(この地区では、勇み踊と呼んでいて、南無天踊とは呼ばれていない。したがって、南無天踊の存否を聞いた際に応答はなかった)であったことが理解できるのである。

ここでは、展示に関連する南無天踊についてのみにとどまったが、〈信仰と芸能〉という点では、お蔭踊についても貴重な資料があり、今回の展示でこのお蔭踊とお蔭詣との関係や伊勢講などの村落内の任意の集団との係わりなど、村人の祈願・信仰を通じてみた村落全員に関連する事象を理解して貰えればと考えている。

(1982. 8. 10了)



▲ 念仏踊 (京都市・空也堂)



▲ 南無天踊の念仏者の風態 (川西町・糸井神社)

大和の民俗行事 ㉔

地蔵盆

— 地蔵盆行事とその源初形態の検討へ —

奥野義雄

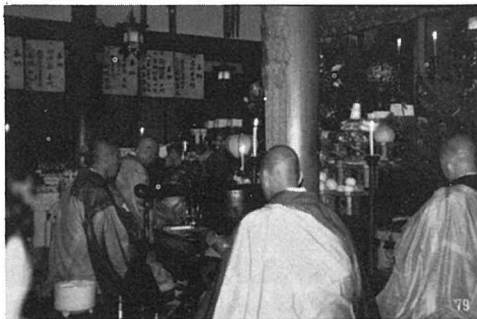
大和・奈良県の地蔵盆は、地域によって異なり、7月24日に地蔵盆を行なう奈良盆地(全地域ではなく、奈良市および周辺が主である)と、8月24日に地蔵盆を行なう盆地周辺および山間に分かれるようである。

この7月24日に地蔵盆を行なう地域の代表的なところとして奈良市帯解周辺を挙げることができ、帯解寺では盛大に地蔵会が営まれるのである。毎年7月23日から24日にかけて地蔵会を行なう帯解寺は、安産の寺としても県内外ともに著名である。この寺では23日の夕刻から大般若經の転読が行なわれ、次第に地蔵会式が盛り上がっていくと共に、境内には近郷の人たちの参詣でいっぱいになる。寺までの参道には夜店が立ち並んで賑いをみせるほどで、参詣者の列は夜遅くまで絶えない。

同寺が7月24日に地蔵会を営む慣習が近郷の町や村の地蔵盆に及ぼしたというほど、奈良市内の地蔵盆は7月24日に行なっている。



▲ 地蔵盆 (奈良市・帯解寺)



▲ 地蔵盆 (奈良市・帯解寺)

たとえば、奈良市芝突抜町や同市芝新屋、そして同市下高畑町などは7月24日に地蔵盆を行なうのである。この2・3の例はその一部分であるが、旧奈良市内を中心に多くみられるところである。すなわち、紀寺町、地蔵町、鶴町、そして元興寺町をはじめとした旧奈良市街地も7月24日に地蔵盆を行なう。

一方、8月24日すなわち新暦で地蔵盆を行なう地域は、県下では旧暦のそれに比べて少ない。

たとえば、その一例を挙げると香芝町良福寺では8月24日に村の南と西の出入口に地蔵を祀って、地蔵盆を地蔵講の人たちが中心になって行なうのである。この地蔵講は一種の村の任意団体と考えてもいいのであろうが、川西町保田にも内じような地蔵講があり、村の相互扶助的役割を果たす念仏講(六斎念仏講とか、六斎講とも呼ぶ)と同じような集団である。

このように旧新暦をとわず地蔵盆には村や町の地蔵(石仏)を祀る行事が夏季に行なわれ、所謂盆行事の一環として民衆の間で受け入れられているのであるが、このような事例は古い時期まで遡れるのであろうか。

いうまでもなく、地蔵信仰は古代以来の信仰を現代まで継承されてきたゆえに、民衆の日常生活に溶け込んだ地蔵菩薩の姿は少なくないが、盆行事に結びついた地蔵菩薩への信仰について検討した論考を、管見の資料からは窺えないようである。

では、この点について少し繙いて、地蔵信仰と民衆との結びつきの一端を考えてみることにしよう。



ここでは、主に中世の文献から地蔵盆の行事を探究する糸口をつかみ、民衆にみる地蔵盆の行事を推察していくこととする。

そこで、まず『多聞院日記』の天正九(1581)年八月と天文十九(1550)年七月の二十四日の条から窺うことにしよう。

①、天正九年八月廿四日の条

ヒカン結日、爲淨春・顯春追善五人ニテ
法同音ラカン供沙汰之、(下略)

㉑、天正九年八月廿日の条

於南井坊地藏講在之、出了、(下略)

㉒、天文十九年七月廿四日の条

稱地藏如常在之、毎日講了、
地藏講於吉祥院在之、(下略)

とあり、地藏盆と結びつく行事は窺えないが、
㉑では「ヒカン結日」(彼岸結日)、㉒では「地
藏講」と関連するようにみえる。この点につ
いて、少し遡ってみると、『大乘院寺社雑事
記』の永正四(1507)年七月、明応元(1492)
年七月、延徳三(1491)年七月、文明十六(14
84)年七月には、

㉓、永正四年七月廿四日の条

地藏講、頭明心、クシタ來

㉔、明応元年七月廿四日の条

講門一座予行之、地藏法樂

㉕、延徳三年十月廿四日の条

講問一座予行之、地藏法樂

㉖、延徳三年七月廿四日の条

講問一座予行之、地藏法樂

㉗、文明十六年七月廿四日の条

講問一座予行之、地藏法樂

とあり、すべてが「地藏法樂」の記述であっ
たことを知る。そして、この「地藏法樂」は
毎年7月24日とはかぎらず、㉕のとおり10月
24日にも行なわれていたことがわかる。この
㉕の事例だけでなく、7月24日以外の24日に
同「法樂」が行なわれていたことを事例以外
の条々で知ることができる。さらに、同様な
事例としては、『経覚私要鈔』の文安四(14
47)年七月および八月の二十四日の条を挙げ
ることができる。すなわち、

(I)、七月廿四日の条

地藏呪勤行少々沙汰之、(中略)、懃行如
形修之、

(II)、八月廿四日の条

地藏懃行如例、(中略)、懃行如形修之、
とあり、7月および8月の24日の同日に地藏
呪の懃行があったことがわかる。また、同年
九月二十四日の条にも同じ記述があり、7月
あるいは8月にかぎられた行事ではなかった
のである。

では、今日まで受け継がれてきた地藏盆と

称すべき盆行事は、いかなる行事が継承ある
いは伝承されてきたものであろうか。

このことについては、すでにみた㉑の「ヒ
カン」(彼岸)との関連から、盆すなわち先
祖供養と地藏信仰とが結びついた結果、生み
出されてきたのではないかと推察できよう。

ただ、この推察はその域を脱していないの
で、今後の課題としたいが、次の文献を列举
して、この諸題の糸口となることを提示して
おきたい。すなわち、『看聞御記』の嘉吉三
(1443)年八月廿三日の条に「彼岸初日也」
という記述がその一例である。しかし、この
ことについては、文献史料を十分に検討した
段階でないで後日に譲ることにするが、地
藏盆がいかなる経緯で民間に流布するようにな
ったかは、その上層階層が遺した記述から
は窺えないことを指摘するにとどめる。ただ
地藏盆の行事を創り出すべき基盤が存在した
ことは、史料や資料を提示するまでもなく、
容易に想定し得るであろう。

(1982. 8. 9丁)



▲地藏盆(奈良市芝突抜町)



▲地藏盆と百万遍珠数くり(奈良市下高畑町)

フィールドノート

宮座資料としての春日社文書

— 一視点へのアプローチ —

大宮守人

神事組織としての宮座^{みやざ}は、全国的に分布しているが、その中心は近畿地方であり、その起源も相当古いようである。

県内の村落における宮座文書で最も古いとされるものは北葛城郡香芝町下田の鹿嶋神社に伝わる結鎮座^{けっちんざ}の「経営古記一卷」^(註1)で、元弘元年(1331年)の奥書がある。さらにこの神社の最も重要な記録として、座衆が結鎮座に入衆した次第を示す人名簿があり、建久七年(1196)に始まり村落の宮座として現在に至るまで約800年の長きにわたる歴史を秘めているということは実に貴重といわなければならない。

さて、この鹿嶋神社結鎮座の草創期と思われる、平安末(鎌倉初期)～南北朝にかけての大和はというと、藤原氏摂関家の領国＝氏神春日社の神領という状況に興福寺が接近をはじめ徐々に財政の実権を掌握して、やがて大和守護を自任するに至るということで、すでに先学の詳しい研究がなされている。^(註2)

このような状況下で大和における宮座の草創が考えられるとするならば、それは当然その時期の中央ともいえる春日社の状況をも認識しなければ大和の村落における宮座の把握も不十分なものといえる。先学の研究を這りつつ認識を新たに、今後の取り組みへのアプローチとしたい。

本社神官の構成 上部組織

春日社の社務を預る社人の構成は、三総官社司・氏人・神人・巫女・及び下人により成っていた。一社を代表する総官を神主・正預・若宮神主と称し、これを三総官と云ってその下に社司が従属し上部組織を構成した。

そのはじめ、春日大神に従って鹿島から上洛した中臣時風・秀行兄弟の後胤は、神宮預、又は造宮預として社務に従い、のち執行正預、或いは単に正預と改称されたが、康保二年(964年)に中臣氏の一族が忌服^{おこなとみ}によって祭礼の奉仕が叶わず臨時に伊勢から大中臣恒瀧が神主に任ぜられて祭礼に奉仕した。これが定住して代々神主職を相伝するに至り、神主職(大

中臣)と正預職(中臣)との両流が生じた。居住地域も三条大路をはさんで南北に分れ、大中臣氏は北の野田(現在の県公会堂付近)に、中臣氏は南の高畑に住んだので、前者は北郷、後者は南郷と呼ばれた。また若宮神主は長保五年(999年)中臣是忠が若宮の御出生を発見したがこの四代の孫・祐房が別社(現在の若宮の位置)への遷宮を司り、その後代々この後胤が若宮神主職を相伝しその世襲となった(姓は中臣であるので南郷方に属した)。

後に北郷神主方大中臣氏は中東氏を号し、他に正真院、西、中西、向井、奥、奥田と分かれ、また南郷正預方の時風流には辰市氏、秀行流には大東氏、後にはこの他千鳥氏、東地井、辰己、新、井原、今西、南富田、大西、等の諸氏に分れている。これらが春日社家と呼ばれたのである。この内から器用により三総官及び社司に長者宜^{しやうし}を得て任官するが北郷神主方では、新権神主から権神主、神主へと進み、南郷正預方では、加任預、神宮預、新預、次預、権預、正預へと進み、官位は四位から三位に至った。^(註3)

本社神官の構成 下部組織

社家の最上臈^{きんぼう}は三総官で、これを三方と呼んだが、下級神官である本社直属の神人(祢宜とも云われる)もまた三方の各に分属していた。即ち、神主方は北郷神人、正預方は南郷神人、若宮方は若宮神人(南郷)と呼ばれ合せて三方神人と総称された。そして居住地も社家と同様、それぞれ北郷、南郷に分かれたため、北郷＝野田神人・南郷＝高畑神人と称された事もある。

これ等、春日社の境内近くに定住したのが直属の宮本衆たる神人で神前奉仕にあたっては黄衣^{こうい}を着したので黄衣神人と称された。神人中にも三方それぞれに所職の分立があり、最上臈の者は社殿に祇候する神殿守に任ぜられ、さらにその内で若干の者が常住神殿守としてその職を世襲した。^(註4)この他、神人中には職事・殿番・出納・膳部・土器・雑器、等の職

があり、これらはそれぞれ三方神人中から選ばれ概ねその職を世襲したが、これら所職にある神人を本神人、その他は平神人として区別されていた。本神人の子弟は幼年中に三総官に目見えをするが、これを「初参」といい、職員録にのせられ神人に補される。補任状は、神人が属する三総官の名（北郷方では大中臣氏）で発給される。さらに、各郷支配下の人々（座衆）が連署してこれを証する。即ち、

春日社政所補 本社^(神人カを捺消)禰宜職事
盛藤丸^(重筆)

右以人所令補任彼職也、早恒例臨時社役ホ無懈怠可令勤仕之狀所補如件、敢不可違失、故下

天文三年十二月廿二日

神主正三位大中臣朝臣（花押）

また神人の連署状は以下の様子である。

春日社北郷方禰宜盛藤丸

於恒例社役并座役等不

残一事可令勤仕者也、仍座衆

各連署加判之狀如件

天文三年十二月廿二日

一萬神殿守玄番^(註5)基勝

二萬神殿守太郎右衛門尉徳殖

三萬神殿守右兵衛守清

四萬神殿守孫左衛門尉基國（花押）

五萬神殿守膳左衛門尉永寛

六萬神殿守忠兵衛尉守藤（花押）

（以下略、他に24人あり）

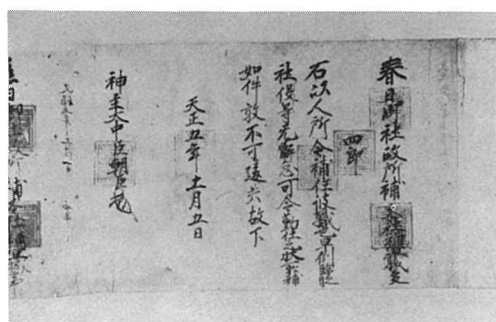
とあり、天文の例を示したが、この他、永正、大永・享録、永録、天正、文録、慶長の年号を持つ同文の文書がある他、大宮氏系図^(註6)「吉守」皇^(註6)弘^(註6)褒^(註6)禿^(註6)（平安末期）の所に、「當職任析子々孫々不可□其沙汰之由、一社連判別紙在之」と見え、代々前掲のごとく行われたものと推察される。「座衆」・「座役」等の語を見るにつけ地域の宮座との関係を考えざるを得ない。

一例を出すに止るが、特に春日本社における下部組織の上層を構成する本社直属神人（祢宜）の職制については、各地域とのつながりを伴って解明することができた場合、各地に残る宮座の草創期に与えた影響が推定される。

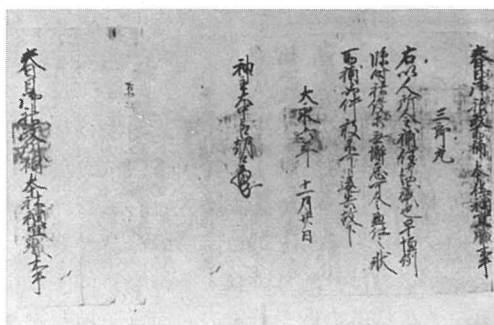
現に、莊園時代に勧請されたと考えられる春日神社が、近畿を中心として各地に多数現



▲盛藤丸補任状（天文3年）



▲四郎補任状（天正5年）



▲三郎丸補任状（大永6年）

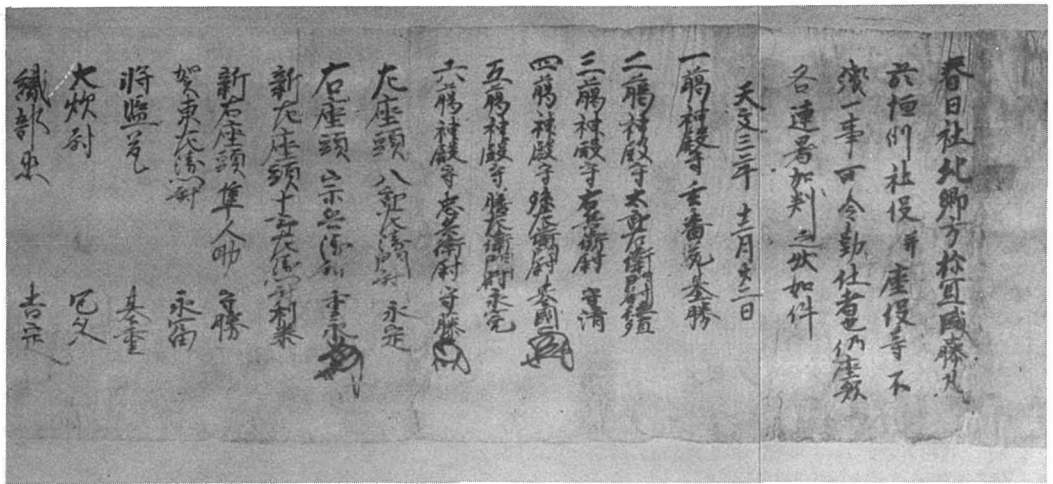


▲乙千代補任状（慶長10年）

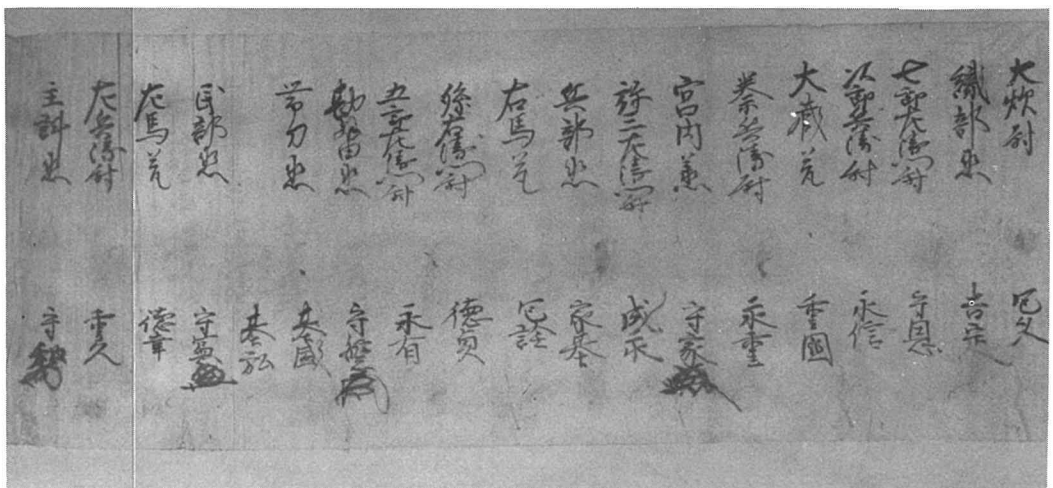
存する事実と考えあわせ、中央部たる春日本社（その周辺も含め）の資料を宮座資料という視点をもってさらに考えてみることは是非必要な事であろう。

なお、座の組織は社寺を問わず存在したであろうがここでは一例として、春日神社文書を取り上げたまでで、他にこうした中央的組織と地域の交渉の構図に関わるものはいくらかも見出す事が出来るであろうが、宮座発生についての一側面を春日社関係の文書から垣間見られればと考える。

- 註1 「下田結鎮座と鹿嶋神社文書」
池田源太氏（『下田村史』所収）
- 註2 『奈良文化の傳流』永島福太郎氏
昭和19年 中央公論社
「中世の春日社神殿守をめぐる法と制度」
秋元信英氏 昭和49年（『國學院大學日本文化研究所紀要 第29輯』所収）
- 註3 「続南行雜錄」古事類苑
- 註4 中世には北郷方大宮氏、南郷方梅木氏の世襲となっていた。
- 註5 大宮家文書（大宮兼守氏所藏）。この文書は、春日社、興福寺文書の一環と考えられるべきものである。
- 註6 同上



▲盛藤丸入衆連署加判状の前半（天文3年）



▲同上・後半

子供の誕生に伴う絵馬奉懸の風習

徳田 陽子

奈良県では、中和地区を中心に、子供が誕生したときに、氏神へ絵馬を奉懸する風習が現在も残っている。この風習について、北葛城郡上牧町新町の春日神社の例を中心に報告し、みていきたいと思う。

同町新町では、春日神社の秋祭の宵宮のときに、生まれた子供の氏子入りと、健康と立派に育つようにということを祈って、親が、春日神社の拝殿に絵馬を奉懸する。この秋祭は10月17日の神嘗祭のときであるが、秋祭の宵宮は、中秋の名月の日なので、新町の人は名月宵宮といっている。この日の朝、前年の宵宮以降に生まれた子供の親が、絵馬を奉懸する。そして、夕方には、春日神社には宮司がいないので郷社である智照神社の宮司にきてもらって春日神社の神前で、子供の御祓をしてもらう。大正時代は尉と媼図の小絵馬を、子供が生まれた家ごとに1面ずつ奉懸していたが、昭和以降は、1年間に生まれた子供の名前を連名で墨書した大絵馬を1面奉懸するようになった。絵馬は、広陵町箸尾や河合町佐味田の荒物屋で購入したという。

以上は、今中伊一郎氏からの聞き取りである。このように、絵馬が小型から大型に変わったことは、現存する絵馬の中に、大正の年号の墨書のある尉と媼の小絵馬があり、また、昭和以降のものは大絵馬であることから確認できた。昭和期の大絵馬の図柄は多様である。現存する35面の大絵馬の図柄の内訳は、武者絵24面、尉と媼図4面、物語絵3面、参詣・境内図2面、馬図1面、芸能図1面である。そのうち、もっとも多い図柄である、尉と媼図は、長寿を意味し、武者絵は武者のように健康で立派に育つようにという意味がこめられている。

なお、上牧町新町の春日神社では明治時代絵馬は、明治29年の武者絵が1面あるだけである。しかも、こ

の絵馬は、墨書された氏名をみると、明治29年当時には10歳前後であった人達であることがわかった。明治時代は、10歳位の子供達が寄付を集めて購入した大絵馬を、秋祭のときにかついで、「エンマ（絵馬のこと）見てくれ」といって村中をみせてまわったあと、神社に奉懸したという。この頃は、子供が誕生したときには絵馬を奉懸しなかったという伝承を、山崎長蔵氏（明治41年生）から聞きした。

そのほかにも、同じ中和地区の子供の誕生に伴う絵馬奉懸であっても、ところにより、多少の違いがみられる。たとえば、橿原市今井町の春日神社の場合は、宮参りのときに、絵馬を奉懸する（宮司・石井栄一氏談）。

以上のように、ところにより、多少の違いがあり、また、明治時代まで、10歳位の子供達が絵馬を奉懸したところもあるので、これらのことをふまえて、さらに、調査をすすめて、子供の誕生に伴う絵馬の奉懸がいつ頃から、どのような形ではじまったのかを追究していきたい。



▲尉と媼図絵馬（上牧町新町春日神社蔵）

※同講座の詳細は当館へお問い合わせ下さい。
定員は80名です。

☆⁵⁷ 11月28日 体験学習講座〈シメナワつくり〉
午後1時から、定員80名

☆⁵⁸ 1月23日 体験学習講座〈タコつくり〉
午後1時から、定員80名

★予告 民俗カルチャー（全3回）講座・民家コースは⁵⁷ 2月13日から開講します。

【表紙解説】 大和高田市の曾爾神社に奉懸された「四季農耕図」の大絵馬である。年未詳であるが、描かれた絵柄からみると江戸時代の作ではないかと思われる。明確ではないが、ただ、往時の農耕と農具がよくわかるといえよう。

■編集後記■

冷夏に近い夏に必要な熱い陽に恵まれなかった稲穂が小さくみえる。8月初めの大雨、時折の台風。すべてが稲穂の成長に関係している。自然に支配されたものの宿命であろう。だが、自然に支配されながらも、弛まなく努力しつづける人間にとって、自然を力強く「我がもの」に創りかえていく。そこにこそ文化が生まれ、遺産がのこる。公園も民家も博物館も文化創造の礎の小さな核であることを目差し、これに働きかけるのが人々の努力と研鑽であろう。

（㊦）

★★★★ お知らせ ★★★★★

民俗博物館の行事予定

☆⁵⁷ 9月23日から11月11日まで

特別テーマ展「奉懸絵馬と村のくらし」

●列品解説と特別講演

⁵⁷ 10月10日(日) 午後2時から

講演テーマ 奉懸絵馬と絵師について

講演講師 奈良国立博物館工芸室長河田 貞氏

列品解説 当館学芸員 徳田陽子

☆⁵⁷ 9月23日～11月11日まで

民俗文化財速報展「現代の祈願・授与小絵馬」

☆⁵⁷ 9月26日 体験学習講座（ナベツカミつくり）

午後1時から 定員80名

☆⁵⁷ 10月17日から11月21日まで（受付期間⁵⁸～⁵⁹）

民俗カルチャー講座・民俗コースⅡ（仏教と民俗の接点を探るⅠ） 午後2時から

％ 念仏を弘めた聖たち 大森恵子氏

％ 南都寺院にみる庶民信仰資料 柴田 実氏

％ 祖先崇拝にみる仏教と民衆 田中久夫氏

％ 仏教文化と民俗 五来 重氏